

青年団×バスカル・ランベール(フランス)

『KOTATSU』第1回報告書〈事業の立ち上げ〉

横堀 応彦

『KOTATSU』第1回報告書

バスカル・ランベールは1962年フランス生まれの劇作家・演出家。2007年から2017年までパリ郊外にあるジュヌヴィリエ国立演劇センターで芸術監督を務め、在任中は同い年である平田オリザ率いる青年団と『砂と兵隊』のフランス語版上演¹、またフェスティバル・ドートンヌと共同で『ソウル市民』『ソウル市民1919』の2本立てで上演²など複数のプロジェクトを実施した。日本では2007年に『愛のはじまり』をこまばアゴラ劇場で上演し³、2010年には富士見・静岡・岡崎で『世界は踊る〜ちいさな経済のものがたり〜』を上演⁴。2013年には代表作の『愛のおわり』を静岡・大阪・横浜で上演し⁵（2016年から2017年にはこまばアゴラ劇場、四国学院大学ノトスタジオで再演）、2018年にはこまばアゴラ劇場で『GHOSTs』を上演している。

今回の青年団国際交流プロジェクト2021『KOTATSU』では『愛のはじまり』に出演していた荻野友里、『愛のおわり』に出演していた兵藤公美と太田宏、『GHOSTs』に出演していた森一生と名古屋愛の5名に、今回が初共演となる山内健司、知念史麻、申瑞季、佐藤滋、浅村カミーラの5名を加えた計10名の青年団の俳優が出演する。これまで日本で上演されたランベール作品はいずれも他の国で既に上演された戯曲が日本語に翻訳されたものだったが、今回の『KOTATSU』は青年団の俳優で上演されることを前提として書き下ろされた新作である。今回の第1回報告書ではプロジェクト立ち上げ時の記録として、戯曲の日本語粗訳が出来上がり、日本側スタッフとの打ち合わせが進行している2021年5月に行ったバスカル・ランベールへのインタビューを収録する。約40年にわたり、およそ30か国で30か国語以上の国際プロジェクトに関わってきた立場から国際共同制作に関する基本的な立場や今回のプロジェクトが立ち上がるまでの経緯についてお話しいただいた。

『KOTATSU』プロジェクト

——今回の『KOTATSU』プロジェクトはバスカルさんと青年団との国際共同制作ですが、バスカルさんにとって国際共同制作を行う際に重視している点について教えてください。

バスカル 私はジュヌヴィリエ劇場で10年間、国際共同制作を続けてきました。その後フリーの演出家となってからも国際共同制作を続けていますが、いずれの場合も私が国際共同制作において私が最も重要だと考えるのは友情という関係性に基づいていることです。特に私はアーティスト同士の友情が重要だと考えています。今回のプロジェクトも平田オリザさんと私の20年にわたる友情を基盤としています。国際共同制作という名のもと、あらゆるところで目立つための単発的なプロジェクトが行われていますが、私にとっては自分自身にとって強い信頼関係がある方と一緒にすることが重要です。先ほど横堀さんがドイツに留学されていたという話をされていました。私のところにもドイツから月に2〜3度ほど仕事の話がありますが、これらは全てお断りしています。私は名前を売るためのプロジェクトやお金のためのプロジェクトに興味がないからです。アーティスト同士を互いに認め合う関係があり、まさに今回のプロジェクトのように互いをわかり合って心底尊敬を感じているアーティスト同士が行うことが重要であると考えています。また制作に関わる皆さんとの関係が友情で結ばれていることも非常に重要で、制作の西尾祥子さんとは長くお仕事させていただいています。

——バスカルさんと青年団は長い間一緒に仕事をされていますが、今回の『KOTATSU』プロジェクトに至るまでの経緯を教えてください。

バスカル 『愛のおわり』を上演したとき、私の戯曲の中に日本語に翻訳する

ことの難しい表現がありました。フランス語で日本語に直訳すると「人生はイチゴの一かごではないのだ」という表現がありましたが、これをどのように翻訳すればいいかが議論になりました。日本語監修の平田オリザさんと翻訳の平野暁人さんと相談した結果、「人生はこたつを囲んでみかんを食べることではないのだ」という日本語に直してもらいました。これは私がロシアやイタリア、アメリカの各国で翻訳の話をするときによく話すエピソードなのですが、そのときに出てきたコタツという言葉が私の中で深く印象に残っていました。そこでゆったりする気持ちのするコタツをテーマの中心に置き、そこに日本人の恥に対する感覚やお正月という静かに過ごすべき時期とSNSの関係を取り入れた作品が出来上がりました。

——長年の関係があってこそ今回のプロジェクトですね。

バスカル これまでに私が日本で制作・上演した作品は5〜6作品あり、ツアー作品も加えると日本でのプロダクションは約20年で10作品ほどになります。少しは日本のことを理解できているのではないかという思いがあり、日本のことは大好きですが、好きだからこそ少しからかった視線で扱いたいという気持ちがあります。というのも、日本の方もフランスのことが好きですが、ちょっと笑っていることも知っていますし、お互い好きなもの同士はからかいあったりするものですよ。そうすることが自然だと思います。今回のプロジェクトは長い間私の頭にあったものです。荻野友里さんとは『愛のはじまり』で、太田宏さんや兵藤公美さんとは『愛のおわり』で一緒にしています。『GHOSTs』で一緒にした森一生さんと名古屋愛さんも今回出演してくれていますし、今まで一緒に仕事をしたことのある青年団の俳優の皆さんと新作を作りたいという思いがありました。私は最近アヴィニョン演劇祭で過去10年間に一緒に仕事をした俳優たちを集めた作品⁶を作ったのですが、そのこともあってこれまで一緒にやってきた俳優の皆さんを集めたいという思いと、青年団の俳優の皆さんのために作品を書き下ろしたいという思いがありました。それが今回初めて実現することになりました。

——台本の粗訳を拝読しましたが、登場人物の名前は俳優の方のファーストネームと同じでした。キャスティングと戯曲の執筆はどのような関係で進んでいったのでしょうか。

バスカル 先にオーディションで出演者を決めました。私はたくさんの俳優たちと会って仕事をします。去年メキシコで作品を書き下ろしましたが⁷、そのときも劇場に所属している俳優全員と会いました。私は新作を作るときには、出来上がったプロジェクトを持っていくのではなく、人に会ってから作り始めるようにしています。今回の『KOTATSU』も東京や豊岡で青年団の俳優の方たちに会ってから作っていきました。例えばオーディションのときにウズベキスタン出身の浅村カミーラさんに会っていなければ、また韓国の生い立ちを持つ申瑞季さんに会っていなければ、今回の作品にはなりません。また『愛のおわり』で太田宏さんには膨大な量のセリフがありましたが、こまばアゴラ劇場5階での(読み合わせのための)第1期稽古後に、太田さんが「なんでこの役はこんなに喋るのだ」と言っていたのを覚えています。そのとき私は「それでは次の作品は全然喋らない役にしましょう」と提案し、それを承諾してくださったことが今回の作品の大きな出発点になっています。私の作品は人との関係から出来上がっていきます。出演者の写真を見ていると、その写真が全てを語ってくれます。私はまるでシャーマンのように写真からエネルギーを感じ取って、様々なエネルギーに言葉を乗せていきながら、その人同士のエネルギーのようなものを書いていきます。

——最後に日本にいらっしゃったのはいつですか？

バスカル はっきり覚えていませんが、2019年だったと思います。

——そこで俳優の方と会われてからプロジェクトの骨子が出来上がっていったと思いますが、台本の配役の上には「2020年11月」「2021年1月」と書いてあって、その間に色々な街の名前が書かれています⁸。新型コロナウイルス感染症の関係でバスカルさんのお仕事にも色々な影響があったのではないかと思います。今回は色々な街を移動しながら戯曲を執筆されたということでしょうか。

バスカル 感染症によって私の仕事のリズムが変わることはありませんでした。香港とニューヨークで予定されていた2作品は半年延期になっていますが、それ以外の全ての作品は公演が実現しています。私はパリ以外で作品を書くことにしています。パリにいるときは家族と過ごすことを大事にしているので、他の街に滞在しているときの午前中に執筆します。

——フランス語圏以外で上演するときは自分で書いた戯曲を翻訳者の方に手渡していくわけですが、言葉を現地の観客に届けるときにはどのような作業を行っているのでしょうか。

バスカル 私はとにかく演出をするだけです。非常にシンプルに、劇作家として、演出家として、演出することだけを考えています。観客に対してどうしようとか、観客に気に入ってもらうためにどうしたらいいとか、逆に観客に嫌われるにはどうすべきとか、私はそのようなことをあまり考えずに一つの芸術的な作品を作る姿勢で仕事に取り組んでいます。私の記憶では日本の観客の方たちは初日の後に自分の意見をそれほど多く表現したりしないですよ。これはフランスとは違って、フランスの観客は初日が終わった後、何時間も話さないと気が済まない人たちで、私はそれを辛く感じています(笑)。このような違いもありますし、日本の皆さんが今回の作品をご覧になってどのようなリアクションをされるかに興味があります。私が演出するときとはとにかくダイレクトに、そしてリアルに演出したいと思っています。今回の作品はまるで映画のようで、長編映画としても撮れるような作品になっているのではないかと思います。私は小津安二郎監督が人々の生活を描く視点に強い影響を受けていますが、小津監督が量の日線から映画を撮っていたと言われるように、この作品は量の日線から書かれている戯曲ではないかと感じています。

——現在プランナーの方との打ち合わせが始まっていると思いますが、今回一緒に作品を作られるスタッフの方々はこれまでも協働してきた方たちですか。

バスカル ほぼ皆さんそうです。例えば技術監督の西本彩さんとは20年近い付き合いで、私はほとんど何も話さなくても物事が伝わるぐらいの関係です。舞台美術と衣裳については、こういうふうにしたいという私のイメージがはっきりしていて、戯曲の中にも描写が入っているので、比較的扱いやすいのではないかと感じています。7月に皆さんと東京でお会いできるのを楽しみにしています。

——7月下旬に東京で2週間の第1次稽古を行った後、8月下旬から豊岡で第2次稽古をされるということですが、今回コロナの影響で当初予定していたスケジュールが変更になったことはありますか。

バスカル いいえ、少なくとも現時点ではまだ変更はありません。7月には予定通り飛行機で日本に行けることを願っています。その頃には私はワクチン接種を完了してから1か月ほど経っている頃になりますし、これまで外国での仕事では3日おきに検査を受けたりしながら仕事を続けていて今のところ罹患していないので、実現することを願っています。とはいえこの先の状況がどうなるか、オリンピックのこともありますので、どのような影響が出てくるかはまだわかりませんが、今は落ち着いて物事がうまくいくように願っています。

——バスカルさんは第1次稽古と第2次稽古の間はずっと日本に滞在されるのでしょうか？

バスカル いえ、私はちょっと日本人的なところがありまして、全然バカンスを取らないんです。7月末に日本を発ってパリに帰ったらすぐに別の作品の稽古に入ります。その作品は『KOTATSU』が豊岡で初演された直後に公演がありますので、その公演が終わってから2週間の休暇を取る予定です。

——先ほど打ち上げ花火的な一過性の国際共同制作には与しないというお話がありました。今回の作品について豊岡以外での上演の計画があれば教えてください。

バスカル この点についてはぜひ西尾祥子さんや平田オリザさんに聞いていただきたいと思います。私はそのような話を先にしないもので、制作的なところは青年団やアゴラ劇場の皆さんにお任せしています。私は書いて演出することに集中したいと考えています。

『KOTATSU』第1回報告書

インタビュー・文：横堀 応彦

通訳：石川 裕美

*本インタビューは2021年5月10日18時から19時(日本時間)までZoomにて実施した。

- http://www.seinendan.org/play/2010/09/2309
- http://www.seinendan.org/play/2016/11/5312
- http://www.komaba-aga.com/line_up/2007_06/debut.html
- https://spac.or.jp/10_autumn/danse.html
- http://www.seinendan.org/play/2013/09/2460
- https://festival-avignon.com/fr/edition-2019/programmation/architecture-2870
- http://www.teatrounam.com.mx/index.php/component/sppagebuilder/209-desaparecer
- novembre 2020 / Tallin / Genève / Paris / Rouchut / Paris / Milan / Séville / janvier 2021